

漢文訓読史概説の構想

小助川 貞 次

富山大学人文学部紀要第56号抜刷

2012年2月

漢文訓読史概説の構想

小助川 貞 次

1. はじめに

日本における漢文訓読史研究の主要材料が訓点資料であることは動かしがたい事実であり、これまで訓点資料に基づいて数々の研究がなされてきた。一方で、訓点資料によって提供される言語事象が、日本語の歴史を研究するための重要な材料の一つであることも事実である。築島裕(1996:26-27)によれば、日本国内には平安時代のものだけでも5000点以上の訓点資料が現存するという。訓点研究・訓点資料研究と漢文訓読史研究とは実際上同じ研究領域に属する。一方で、漢文訓読を学校教育の中で修得する若者は、高等学校卒業業者で考えるならば年間100万人以上おり、その中からさらに生涯に渡って漢文訓読を愛好する者も少なからず存在する。したがって、漢文訓読に対する関与の仕方(訓読ユーザ)には、以下の二種類がある。

A: 訓読というツールによって漢文文献を理解しようとする一般ユーザ

B: 訓読構造や訓読から得られる言語事象に関心をもつ特殊な研究者ユーザ

Aに対する入門書や概説書は数多くあるし(書店の参考書コーナーに行けば「漢文入門」に類する書籍はいくらでも並んでいる)、また定評のある入門書や概説書もいくらでも挙げる事ができる。ところがBに対する入門書や概説書となると極めて少ない。確かに過去に入門書の類がまったくなかったわけではない¹⁾。しかし、訓点資料に基づいて漢文訓読を考えていく限り、訓点資料は現存点数が多い割には非日常的なモノとして存在していて、テキスト(文字情報)でいくら説明されても、初心者には(あるいは分野の異なる研究者自身にとっても)容易には理解しがたい。さらに、訓点資料とはどのような構造物なのか、訓読とはそもそもどのような言語活動なのか、ということに対する理論的な考察がないということも、分かりにくさの要因であろう。そして何よりも、近年の研究が急速に進展・精密化していて、一人の研究者が漢文訓読史の全体像を把握することが非常に難しいということが、B(あるいはA)に対する入門書・概説書を書けないという最大の理由になっていると思われる。

本稿は、稿者の抱くこのような現状認識と最近の研究成果に基づいて、「漢文訓読史概説」を記述するために描く構想である。

2. 訓読研究と訓読概念の広がり

2.1 訓読研究の広がり

東アジア（一部東南アジアを含む）における漢文訓読史を現存資料（加点資料）に基づいて素描すれば図1のようになる。

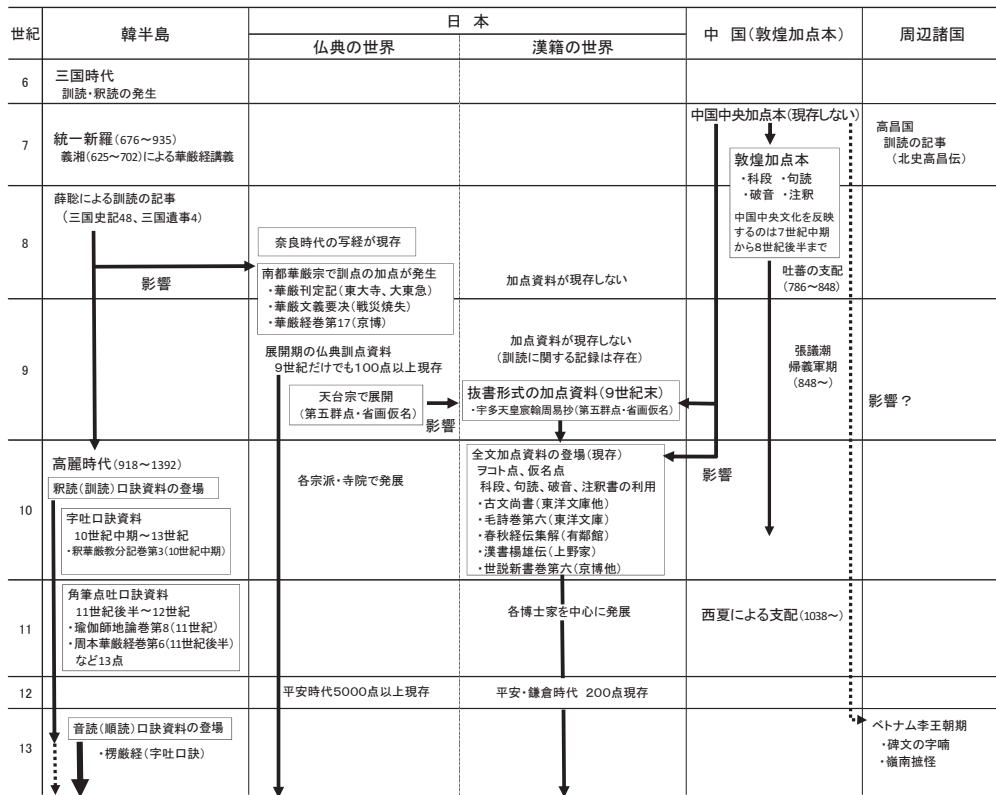


図1：現存資料に基づく東アジア漢文訓読史関係図

漢文訓読は日本独自のものではなく、中国はもとより、漢字文化が及んだ中国周辺諸国の中で、それぞれの言語によって行われていた言語活動である。このことは一般にはほとんど知られていないが、研究者の間では1960年代後半から認識されていた。特に2000年に韓国で発見された高麗版瑜伽師地論に角筆で加えられた符号（日本のワコト点に該当する点吐口訣）は、これまでの漢文訓読の常識を根底から覆すものであり、漢文訓読の国際的研究を飛躍的に発展させる大きな契機となった。このような東アジアに広がる漢文訓読について石塚晴通(2001:2)は、「漢文訓読は、漢文を自言語で理解することでは翻訳と似るが、漢文構文の原表記を残したままで其れによりかかりながら自言語で理解するという点で翻訳とは異なる。訓読は、特殊

な、しかも巧妙な言語活動である。漢文訓読は、日本語のみで行われたわけではなく、他言語による訓読も行われた。」と説明した。現在までに公表された東アジアにおける漢文訓読史に関する研究成果は相当な数に上る。

2.2 訓読概念の広がり（訓読とはどのような言語活動なのか）

一方、非漢字文化圏、すなわちヨーロッパ世界での同様の現象については日本の漢文訓読研究者にはほとんど知られていないが、ホイットマン (Whitman, John 2011:112) によれば、中世ヨーロッパにおいてラテン語原典にヨーロッパ諸語で直接書き込んだ「注釈資料」が存在し、すでに19世紀から研究が行われてきたという。これをいわゆる「訓読」と呼ぶかどうかについては、現在の訓読概念では疑問視する可能性もあるが、語順符の加点を根拠として訓読資料として認定してきた、大東急記念文庫蔵華嚴刊定記や韓国修徳寺蔵旧訳仁王経などと同じように、ラテン語原典に古英語でローマ字、ローマ数字、点などで語順を記入したのがあることから考えるならば、やはり訓読と見なさなければならぬだろう。さらに想像を畏れずにいうならば、中世ヨーロッパ世界においては、東方から持ち帰った漢文文献（仏典・漢籍）をヨーロッパ諸語で読解する場面や注釈資料も必ずや存在したはずであろう。

また、敦煌文献（仏典・漢籍）に見られる中古漢語での読解・加点（敦煌加点本）が訓読であるならば、同じように日本の古典籍（国書）に見られる注釈活動（例えば、万葉集における「古点」「次点」「新点」）も「訓読」と見なすべきであろう。このように訓読の広がりを考えてみると、先の図1の周辺にはさらに複数の「世界」が存在することになる（図2）。

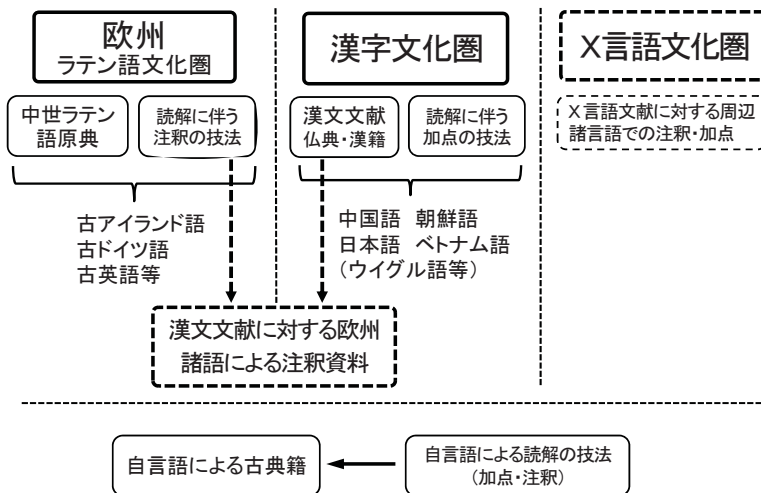


図2：訓読概念の広がり

いずれの「世界」においても重要な共通点は、読もうとする対象物（テキスト）が、ある時代ある地域において広く分布・存在した古典籍（仏典、漢籍、聖書、国書）であるという点である。したがって訓読は、その場限りの単なる通訳や翻訳ではなく、その古典籍の内容を深く見極めようとする学問的な活動であったことになる。ここまで拡大すると、訓読はもはや先の石塚晴通(2001)の定義でカバーすることは不可能となり、たとえば「自言語による古典語文献に対する超時空間読解」とでも定義し直さなければならなくなる。本稿は、このように訓読の概念の広がり認識した上で、対象を漢文文献に限定して述べることにする。

3. 絶滅危惧研究種としての漢文訓読史研究

3.1 訓読に対する認識

訓読を漢文文献に限定しても、東アジアにおいて訓読が行われていたということに対する認識は、ごく一部の研究者を除いて極めて乏しい。最近、金文京『漢文と東アジア—訓読の文化圏』(岩波新書(新赤版)1262, 2010年8月)が出版された(帯のキャッチコピーには「漢文訓読は日本独自のものではない」と記される)。本書によって漢文訓読に対する社会的理解がさぞかし拡大したかに思われた。しかし、最も情報伝達が速いはずのWeb上の百科事典Wikipediaにおいても、「訓読」の項目には「訓読(くんどく)とは、漢文を読む際に中国語、朝鮮語や仏典の読経などのように音読みせず、漢字の字義による訓読みを利用して、日本語として読むことである。」と説明され、わずかに「日本以外の訓読」という項目に「新羅・契丹・渤海・ウイグル・ベトナムなどに訓読現象が見られる。」として本書が注扱いで記されているに過ぎない。Wikipediaには別に「漢文訓読」の項目もあるが、「漢文訓読(かんぶんくんどく)とは、文語体中国語の文章である漢文を文体をそのままとして、符号などを付けることによって日本語の語順で読解できるようにすること。」とあってほとんど変わらない。このような社会的理解の不足については、すでに小助川貞次(2008), 同(2010b), 同(2010c)で指摘したが、この数年間、何も変わっていない。

その理由として、おそらく次のような二つの問題があると考えられる。第一点は、学校教育(高等学校「国語」)の中で教え込まれた訓読に対する固定観念であり、毎年100万人の訓読ユーザーが社会に送り込まれ、これを支えているという点である(ちなみに、訓点語学会の会員数は平成23年5月22日現在でわずかに413名)。第二点は、先の金文京『漢文と東アジア』にはいくつか図版が掲載されているが、一般には漢文訓読資料(日本、中国、韓国、ベトナムなど)を日常的に目にするできないという点である。もちろん、写真や画像が全くないわけではなく、e国宝(国立博物館所蔵国宝・重要文化財)やIDP(IDP(International Dunhuang Project))には有用なものが高精度の画像で提供されているし、近年は大学図書館や特殊文庫で

も画像公開が進んでいる。しかし、それらの画像は漢文訓読資料としてではなく、漢文資料としての価値に重点がおかれているように思われ、加点状態や加点内容については十分に確認できないケースもある。また、日本の場合、訓点資料の大半を占める仏書訓点資料については公開がほとんど進んでいないという事情もある（寺宝という立場からすればやむを得ないと言える）。

3.2 研究者の現状

それでは、このような訓点資料を扱う研究者側の問題はどうかといえば、研究者不足という極めて厳しい現状にある。一つの判断材料として、国立国語研究所「日本語研究・日本語教育文献データベース」（1950年以降、2011年8月までの紀要と雑誌を対象）で論文名に含まれる「訓読」または「漢文訓読」、「訓点」または「訓点資料」が含まれるものを検索してみた（表1）。「源氏」または「源氏物語」、「万葉」または「万葉集」に比べて格段に少なく、「方言」と比べると桁違いに少ない。もっとも、「訓読」などのキーワードを持たない論文もあるので、訓点語学会の機関誌『訓点語と訓点資料』（第1輯：1954年～第127輯：2011年）に掲載された論文・資料すべてでカウントすると629本（巻頭挨拶等も含む）。それでも「方言」の10%しかない。さらに、2011年度の大学シラバスを「訓点資料」「漢文訓読史」のキーワードで検索してみると（Google 2011年10月19日15:52～15:53検索）、訓点資料や漢文訓読史を扱う授業がほとんど開講されていないことが分かる。これが現在の大学における漢文訓読史研究の現状であろう。漢文訓読史研究が「絶滅危惧研究種」であることは、もはや間違いない。

表1：データベースでみる論文数

条件（キーワード）	件数
訓読または漢文訓読	413
訓点または訓点資料	223
源氏または源氏物語	1,563
万葉または万葉集	1,724
方言	6,290

表2：Googleでみる授業開講数

条件（キーワード）	件数
シラバス+大学+2011+方言	33,800
シラバス+大学+2011+訓点資料	24
シラバス+大学+2011+漢文訓読史	2

3.3 研究態勢の衰退の原因

このような研究態勢の衰退は、大学改革に晒されている現在の環境では、他の研究分野でも起こっていると予想されるが、しかし方言に関する上記の論文数やWeb上でのヒット数を見ると、どうもそうでもないのかもしれない。衰退の要因は複雑であって、見極めることが難し

いが、研究態勢の衰退には三つの要因が指摘できるだろう。

(1) 研究者構造の問題

大矢透の『仮名遣及仮名字体沿革史料』(1909年)をもって、訓点資料に基づく漢文訓読史の近代的研究の始まりとするならば、現在までに6世代を設定することができる。

草創期・第1世代：資料発見と学問的位置づけ

第2世代：資料全体の見通し・資料の分類・学問的確立

第3世代：発展的世代(海外資料、漢字音)

第4世代：批判的継承・コンピュータ世代

第5世代：国際派・インターネット世代

第6世代：大学院修了前後の最若手世代

稿者は第4世代に含まれ、50代半ばの研究者が多い。第3世代はすでに定年退職を迎えている。どの研究分野にも世代はあるが、漢文訓読史研究の場合、第3世代までの研究者があまりにも偉大すぎて、第4世代以降の研究者にとっては追い越し／乗り越えることができない壁になっているのではないかと思う。これは稿者の実感としてあるだけではなく、訓点語学会の機関誌『訓点語と訓点資料』及び研究発表会の本数に対する大きな片寄りからも窺われる事実である。

表2：訓点語学会発表回数別の発表者数

1回～5回：200人(414本)	31回～35回：1人(32本)
6回～10回：25人(186本)	36回～40回：2人(75本)
11回～15回：10人(127本)	46回～50回：2人(95本)
16回～20回：7人(122本)	56回～60回：0人(-)
21回～25回：2人(46本)	61回～65回：3人(189本)
26回～30回：2人(54本)	76回～80回：1人(76本)

機関誌：629本(第1輯～第127輯) 研究発表：725本(第1回～第105回)

合計：1354本(共著・共同を分割：1416本) 発足：1954年

発表者総数1416名 異なり255名 会員数：413名(2011年5月現在)

この表によれば、21回以上の発表者は13名で、これは全発表者（異なり）のわずか5%に過ぎないが、発表本数（分割本数1416本、以下同じ）は567本で40%も占める。一方、5回以内の発表者は200名で、全発表者（異なり）の78%を占めるが、発表本数では414本、29%に過ぎない。なお、1回のみ発表者は91名で全発表者（異なり）の35%を占めるが、発表本数では全発表数1416本（分割本数）のわずか6%に過ぎない。この数値は、特定研究者による学会の寡占状態を示しているのではなく、むしろ研究を継続している研究者が極めて少ないことを表していると思われるべきである。具体的な研究者名は挙げないが、21回以上の発表者13名の内、第2世代が10名、第3世代が1名、第4世代が2名である。つまり、稿者の含まれる第4世代及びそれよりも若い第5世代・第6世代にとって、第3世代より上の世代の研究者の業績には追いつくことはもちろん、超えることなど到底困難なのである。ちなみに、稿者が定年までの10年間でトップの76本に追いつくには、年2回の研究発表会（審査あり）で毎回発表し、年2冊の機関誌（査読あり）に毎号掲載されなければならない。

（2）資料構造の問題

漢文訓読史研究の主要な材料となる訓点資料には、漢文文献が持つ構造的な問題と訓点を持つ構造的な問題の二つがある。前者の漢文文献の構造については、小助川貞次(2011a)は注釈構造から考えなければならないと述べたが、漢文文献の内容が漢籍か仏典か、テキスト内に注釈書が組み込まれるか組み込まれないかによって、少なくとも4種類の構造が成り立つ（表3）。実際には、テキストに明示されない注釈書の関与の仕方によってさらに複雑になる。

表3：漢文の内容と注釈書の関わりとからみた漢文文献

	注釈書		
	有注	無注	
漢籍	A	B	A：経書・史書，B：A以外の漢籍
仏典	C	D	C：少数の仏典に限られる，D：大半の仏典

漢籍Aの内、経書の場合をもう少し詳しく示すと図3のようになる。



図3：漢籍経書の階層構造（注釈構造）

一方、後者の訓点の構造についてはさらに複雑で、訓点は下地にある漢文文献を読解した結果であり、かつその漢文文献はいずれも古典籍であるという点を強く認識する必要がある。一つの訓点の背後には必ず学問的集積と学問的研鑽があり、実際に加点されている訓点は、加点者によって選択・決定された一部分でしかないということである。なぜそこに加点があるのかという加点意図を考える際には、このような思考プロセスは極めて重要である。さらに困難なことには、現れた訓点は通常の文字表記ではないことが多いということである。仮名字体やヲコト点、様々な符号を解読するという手順が必要となる。ヲコト点や仮名字体についての専著があるということは、それだけ訓点資料の扱いが難しいということを示している。

資料構造の問題は、この二つだけではない。近時、解明が進められている角筆点は、このような困難さにさらに輪をかけているように思われる。角筆点は細い棒状のもので紙面を凹ませることで記される筆記具・筆記法であり、通常の可視光線での確認は容易でないことが多い。朱・墨点を用いた従来から知られている加点資料にはもちろんのこと、これまで加点がないとされてきた、奈良朝写経や舶載写経にも角筆点があることが報告されている²⁾。角筆点によって解明されてきた事柄には極めて重大な発見もあり（韓国の点吐口訣資料の発見など）、角筆点の存在には常に最新の注意を向けなければならないことは言うまでもない。ただし、角筆点は朱・墨点のように、いつでも誰にでも容易に確認できるものではなく、紙の状態（皺や繊維の混ざり具合）や調査時の光線の加減（凹みに当たった光線の影なのか、凸に当たった光線の影なのか）、調査者の視力など、様々な幸運な条件が求められる。

このような複雑な資料構造を前提にして調査しなければならないことが、若い世代にとっては極めて重い負担になっているように思われる。

（3）調査環境の問題

このような資料構造の問題は、近時急速に進展している原資料の高精度なデジタル化によって一気に解決されるかに思われた。研究者は研究室や自宅にいてモニターを眺め、様々な画像処理を加えたり、データベースによって統計的な検討を加えたりしながら、時間を気にせずに研究できるからである。若い世代にとっては「入りやすさ」が格段に増したように思われる。しかし、原資料のデジタル化は、閲覧の便宜・自由と引き替えに原資料の実見（原本閲覧）を制限する方向に向かって行く／向かいつつある³⁾。研究が進展し精密化すればするほど、直接原本を手にとって確認しなければならない事柄は増えてくる（角筆点などはその好例である）。何のためのデジタル化なのか、そこにどのような利用目的を想定するのか、ここにも困難な問題を見出すことができる。

4. 研究継続の可能性

以上述べたような訓読研究と訓読概念の広がり、絶滅危惧研究種としての漢文訓読史研究を踏まえて、それでは漢文訓読史研究は継続できるのか、という点について述べる。

日本語による訓点記入が始まって1200年余り経過したが、冒頭に述べたように訓読ツールは毎年100万人ユーザによって維持されており、学習指導要領が大きく変更されない限り、当面はこの状態が続くと楽観される。しかし、これから1000年後（西暦3000年）には、日本人は絶滅（当然、日本語母語話者も）する⁴⁾という統計学的推測にも目を向けておかなければならない（表4）。

表4：今後の人口減少

年次	人口総数 (1,000人)
2009	127,510
2010	127,415
2050	92,544
2100	47,100
2200	12,164
2300	3,142
2400	812
2500	210
2600	54
2700	14
2800	4
2900	1
3000	0

国立社会保障・人口問題研究所、「人口統計資料集：表3-8 2009年出生率、死亡率一定による人口指標」による。

1000年後の人口問題など、漢文訓読史研究や漢文訓読史概説にとっては全く無関係のように思われる。確かに、漢文訓読によって日本語の中に組み込まれた音韻、表記、語彙、語法など、現代語を分析する上で重要な事項ならまだしも、漢文訓読史研究は現代社会にとってどのような意義があるのかと問われると、正直なところ明確な解答を示すことはなかなか難しい。しかし、どの言語文化世界にあっても古典（籍）を有し、それを後世に伝えるために様々な努力を重ねてきたことは周知のことであるが、漢字文化圏の場合は、この活動が特に強力で広範囲かつ長期間に及び、現代にまで続いている。その際に、訓読が通訳や翻訳とは異なる仕組みとして機能していたことは、極めて重要なことである。訓読研究と訓読概念の広がりですべてのように、訓読を「自言語による古典語文獻に対する超時空間読解」と捉えるならば、行き着くところは「人類の知的活動史の一面」をグローバルな観点から明らかにすることに他ならない。日本語による訓点記入が始まって1200年、日本人が絶滅するまで残り1000年、この間2200年のほぼ中間地点で、

これまでの研究を振り返ることは、今後の「人類の知的活動」を予測する上で極めて意義のあることだと思う。

稿者は、所属する富山大学において2001年から漢文訓読史についての講義を継続して行ってきた（教養教育、学部教育）。当初からこのような「人類の知的活動史」を意識していたわけではないが、これまでの教育活動、研究活動を振り返ってみると、結果としてそのような方向を目指していたことが分かる。

○大学教育における可能性

(教養教育：教養原論「言語と文化」)

- ・2004 前期：訓読から kundoku へ (3 期全学部)
- ・2005 前期：ようこそ新「漢文訓読」の世界へ (1 期全学部)
- ・2006 前期：ようこそ「漢文訓読」の新世界へ (1 期全学部)
- ・2007 前期：ようこそ「漢文訓読」の新々世界へ (1 期全学部)
- ・2010 前期：未知世界への挑戦－東アジア漢文訓読史の構築－ (1 期全学部)
- ・2011 前期：「漢文訓読の世界」大図解 (3 期全学部)

(人文学部：日本語学特殊講義)

- ・2001 前期～2004 後期：漢籍訓読史の研究
- ・2005 前期～2010 後期：東アジア学術交流史としての漢文訓読
- ・2011 前後期：東アジア漢文訓読史概説

この間、上記のほぼすべての授業において、双方向型の「確認カード」を使い、受講学生の反応を記録してきた。現在は整理中の段階であるが、いずれまとめて報告したいと考えている。

○研究の国際的広がり

国際ワークショップや国際会議への参加・発表

- ・2001 年：国際ワークショップ「漢文古版本とその受容（訓読）」、北海道大学
- ・2002 年：国際ワークショップ「典籍の国際的交流・受容（訓読）」、北海道大学
- ・2003 年：日韓漢字・漢文受容に関する国際学術会議、富山大学
- ・2004 年：国際学術会議「日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開」、北海道大学
- ・2005 年：国際東方学者会議シンポジウム「漢文の自言語による訓読」、東方学会
- ・2005 年：国際学術会議「漢文訓読法とアジアの文字」、ソウル市立大学
- ・2006 年：国際ワークショップ「典籍交流（訓読）と漢字情報」、北海道大学
- ・2007 年：韓日国際ワークショップ「古代韓日の言語と文字」、ソウル大学
- ・2007 年：国際シンポジウム「日本漢文の黎明と発達」、二松学舎大学
- ・2008 年：韓日国際ワークショップ「古代韓日の言語文化比較研究」、ソウル大学
- ・2008 年：国際学術会議“Globalization and Asia”、明知大学（韓国）
- ・2009 年：国際ワークショップ「漢字情報と漢文訓読」、北海道大学
- ・2009 年：日・韓訓読シンポジウム、麗澤大学
- ・2010 年：日韓言語学者会議－韓国語を通じた日韓両国の相互理解と共生－、麗澤大学
- ・2011 年：第 13 回ヨーロッパ日本研究協会国際会議、タリン大学（エストニア）

科学研究費補助金（小助川が研究代表者のもの）

- ・ 2004-2006 年（基盤 B）：国際的視点から見た日本語・朝鮮語における漢文訓読に関する実証的研究
- ・ 2007-2009 年（基盤 B・海外学術調査）：国際的視点から見た漢字文化圏における漢文訓読についての実証的研究
- ・ 2007-2008 年（基盤 C）：日本語訓点資料を国際的に共有するための標準の構築
- ・ 2010-2011 年（萌芽）：国際的共有知財としての漢文訓読に関する戦略的研究
- ・ 2011-2013 年（基盤 B）：東アジア漢文訓読史モデルに関する実証的研究

国際的研究グループの形成と活動

- ・ 漢文訓読用語の国際的共有研究グループ（2009 年～：伊 1，米 1，韓 2，日 3）
- ・ EAJS 研究発表グループ（2010 年～：伊 1，米 1，日 3）

日韓での共同研究，研究協力が 10 年以上継続し，ここ数年は欧米の研究者も含めた国際的な共同研究に発展している。

○「一般の訓読ユーザ」とどう関わるか

漢文訓読史の研究状況が極めて厳しい状態にあることはすでに述べたが、「ツールとしての訓読」あるいは「一般ユーザ」はこれとは全く逆である。例えば，高等学校における国語教科の必修科目「国語総合」（現行の学習指導要領では「国語表現Ⅰ」との選択必修になる。平成 21 年 3 月公示の改訂学習指導要領（平成 25 年 4 月から年次進行で適用）では必修科目は「国語総合」のみとなる）を履修する生徒は年間 100 万人と推定され（平成 23 年度全日制卒業予定者数で 99 万人），国語総合に含まれる漢文を履修した訓読ユーザは毎年 100 万人ずつ増え続けていることになる。一方，センター試験の国語受験者は平成 23 年 1 月実施分で 50 万人おり，第 4 問の漢文に取り組んでいる。さらに，漢字能力まで拡大して考えるならば，（財）日本漢字能力検定協会が実施している漢字検定の受験者（平成 22 年度受験者 230 万人）も訓読ユーザに含めることができるかもしれない。漢文訓読史研究が，このような「一般の訓読ユーザ」にも目を向けることができれば，新たな展開が期待できるかもしれない。また，全国漢文教育学会（1966 年設立，1984 年改組，会員数 800 人）は，学校教育に対する関心が非常に高く，訓点語学会がこのような教育活動を母体とする団体と連携することも必要かもしれない。いずれにしても，漢文訓読史研究が一般の訓読ユーザとどのように関わるのかという観点を真剣に考えなければ，厳しい現状が改善される見込みは極めて乏しいと思われる。

5. 研究に求められる可視性と体験性

最後に、研究に求められる「可視性」と「体験性」について述べる。これまでも初学者用の訓点研究／訓点資料の入門書や概説がなかったわけではない。例えば、以下のような著書・論文は訓点研究・漢文訓読史研究を始めるに当たって、非常に有用なものであることは間違いない。

- ・遠藤嘉基『訓点資料と訓点語の研究』（中央図書出版，1952年）
- ・築島裕「訓点資料とその取扱ひ方」（『国語と国文学』第37巻第10号，1960年）
- ・廣濱文雄「訓点資料研究の足跡」（『訓点語と訓点資料』第25輯，1963年）
- ・小林芳規「特集国語学の新領域訓点資料・記録資料」（『文学・語学』48，1968年）
- ・築島裕『平安時代語新論』（東京大学出版会，1969年）
- ・築島裕『仮名』（『日本語の世界』5，中央公論社，1981年）
- ・築島裕「訓点語研究の足跡を辿つて」（『訓点語と訓点資料』第93輯，1994年）
- ・石塚晴通「訓点語研究今後の展望」（『訓点語と訓点資料』第93輯，1994年）
- ・小助川貞次「進化する訓点資料」（『日本語学』第19巻第11号，明治書院，2000年）
- ・月本雅幸「訓点語学研究法」（『訓点語辞典』，東京堂出版，2001年）

しかし、これらすべてに共通するのはテキスト中心の論述であり、前述したように訓点資料の複雑な構造を理解するには、「モノ」や「体験」が必要である。例えば、陶芸において、土のこね方、轆轤の回し方、上塗りの仕方、窯焼きの仕方などをテキストだけで理解しようとするのは、初心者にとってはほとんど無謀に近い。また、水泳について、どんなに先進的な修得理論を学んだとしても、実際に水に入って練習しなければ泳げるようにはならない。従来の入門書や概説書は、初心者・初学者にとっては未修の外国語文献をいきなり手渡されるのと同じようなものである⁵⁾。「見える」あるいは「触れる」ことこそが重要であると思われる。

同様に、分野の異なる研究者にとっても、実際に訓点資料を扱ったことがなければ、研究方法や調査方法はわからない。卷子本を紐解いた経験がなければ、開いたが最後、二度ともとの箱には収まらないという事態が起こることは容易に想像できる。これが理科器具の場合なら、中学校や高校で一通りの操作を経験しているが、古典籍の原本の場合には、学校教育の中で実際に触れる経験はまずない。さらに、モノはそもそもどこに所蔵されているのか分からないことが多い。訓点資料は国宝・重要文化財の指定品が多く、公的機関（博物館・図書館）の場合にはまだしも、寺社の場合は個人での閲覧申込は相当に難しく、ましてや個人蔵の場合は連絡をとることさえできない。先に述べたデジタル資料では、このような面倒な問題は回避できるが、

しかし、原本でなければ得られない貴重な情報を犠牲にしなければならない。

就活の世界では、一組 20 万円もするビジネスマナーの DVD が飛ぶように売れている。加えて毎週のようにキャリア支援事業が、多くの場合無償で提供されている。このようにして、様々なキャリア支援をシャワーのように浴びせられても、学生はビジネスマナーやコミュニケーション能力はなかなか身につかない。実体験が伴わないからだと思う。同じように、漢文訓読史概説がテキストベースだけであるならば、学生の関心を引き出したり、あるいは研究に誘ったりということも、そもそも無理であろう。また若い研究者に対しても、何かしらプラスになるような情報を提供できたとしても、肌で感じ取らなければならないことがらは数多くあり、やはり最後は体験しかないように思う。4 節で述べたように、稿者が展開している授業では、毎回、あるいは場面に応じて学生の率直な感想を収集し記録し続けている。可視性と体験性に加え、学生の生の声を踏まえた概説を構築することが必要である。

注

- 1) 第 5 節参照。
- 2) 小林芳規 (2004 : 353-)、同 (2004 : 260-) に詳細に論じられている。
- 3) 小助川貞次 (2010a) で指摘した。
- 4) 黒木登志夫 (2011 : 167-169) 参照。
- 5) 小助川貞次 (2011b) では稿者自身がどのように修得したかという過程を簡単に紹介している。

引用文献

- 石塚晴通 (2001) 「総論」(『訓点語辞典』, 東京堂出版)
- 黒木登志夫 (2011) 『知的文章とプレゼンテーション』(中公新書 2109)
- 小助川貞次 (2008) 「漢文訓読研究の国際的共有と教育的還元について」(『富山大学国語教育』第 33 号)
- 小助川貞次 (2010a) 「デジタル化時代に対応した漢文訓読研究の社会的共有システムの構築」(『富山大学人文学部紀要』第 52 号)
- 小助川貞次 (2010b) 「地方国立大学における絶滅危惧研究種を巡る教養教育・専門教育の取組」(第 16 回大学教育研究フォーラム, 京都大学高等教育研究開発推進センター, 2010 年 3 月 18 日)
- 小助川貞次 (2010c) 「漢文訓読史研究を学ぶ学生の視点」(国研・共同研究プロジェクト「訓点資料の構造化記述」研究発表会, 国立国語研究所, 2010 年 7 月 9 日)
- 小助川貞次 (2011a) 「漢文文献の階層構造 (注釈構造) と朱点との関係について」(第 104 回訓点語学会, 京都大学文学部, 2011 年 5 月 22 日)
- 小助川貞次 (2011b) 「私が勧めるこの一冊「築島裕著『平安時代語新論』」(『日本語学』第 30 巻第 12 号)
- 小林芳規 (2004) 『角筆文献研究導論』(上巻東アジア篇, 汲古書院)
- 築島裕 (1996) 『平安時代訓点本論考 (研究篇)』(汲古書院)
- ホイットマン (Whitman, John 2011) “The ubiquity of the gloss”. *Scripta* 3, 95-122.

付記

本稿は科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究「国際的共有知財としての漢文訓読に関する戦略的研究」(代表者：小助川貞次, 2010 年～2011 年) の研究成果の一部である。